

花園大学 日本文学科 通信

第6号
通巻34号

二〇一三（平成二十五）年六月一日発行
編集・発行 花園大学日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京霊ノ内町八一
TEL 〇七五 八二一―五二八一（代）
振替 〇一〇五〇―一四三九九五

有為転変を生きるということ

澤 正宏

マグニチュード九・〇、震度六強の地震の体験は強烈で、食器など皿は飛び交う、本棚は倒れる、ついにピアノが移動したので縁側から庭に飛び出しました。外での揺れも同様で、近所の家の屋根瓦がお手玉のように空に向かって飛び上がる、農作業にきている軽トラックは横転する、電線は波打つ、地面も波打ち、地面に出来た罅割れが伸縮するといった、この世の終わりと観念させる凄まじさでした。しかもこれで終わりではなく、急に真っ暗い空となり、大きな雷鳴が轟き、猛吹雪に見舞われたのです。逃げ場もなく、咄嗟に「ああこれが地獄の情景なんだ」と思い、仏教書やダンテが記述した地獄が脳裏を過ぎりました。

しかしそれは序章で、本当の地獄は続いて襲来した津波、翌日からの相次ぐ原発事故にありました。私の住む福島市は内陸なので津波の被害からは免れましたが、放射能被曝という災厄に見舞われました。とくに三月十五日の福島原発第2号機の格納容器から漏洩し、福島県どころか関東圏にまで被害を及ぼした九〇万テラベクレルという放射性物質を被曝するという問題は、その後、福島県人や日本人だけでなく世界中の人々にとっても大きな問題となっています。

なぜなら、日本の政府はこの日、自らが現地で実測していた放射線量をすぐに公表せず、アメリカエネルギー省が翌々日（十七日）に提供した実測値をも公表しなかったからです。私も政府発表の「ただちに人体に影響を及ぼす数値ではない」という言葉を信用し、放射能が降る戸外で給水を受けると、何日か長時間ならんでいたのです。考えてみれば政府の言葉は、直ちにではなくても何年後かには影響が出るという意味だったのです。

福島はいま、こうした類いの政府や電力会社による原発事故の「隠蔽」に見舞われています。そして、溜まり続ける汚染水、汚染土、放射能を出し続ける使用済み核燃料、見通しのない廃炉作業など明日は見え、百年後でも収束しない状況にあります。想定されている次の大震災をも念頭に置いて、有為転変をもたらし、こうした状況を生きていくことを請け負っている毎日です。

（福島大学名誉教授、本学旧教員）

◎日本文学会 公開講演会（聴講無料）

日時 七月六日（土）

午後一時半～四時四十分

場所 花園大学・自適館三〇〇教室

講演

源氏物語絵を読み解く

同志社大学教授 岩坪 健

村上春樹文学の行方

千里金蘭大学教授 明里千章

まだまだ道なかば

鈴木 千秋

「君たちは大学に書道をこれから一生かけて学んでいくための学び方を身につけに来たにすぎない。」大学の書道実習の時間に恩師である中島皓象先生がおっしゃったこの言葉を今でも時折思い出すことがある。

現在、大阪市の単位制の高等学校で書道の非常勤講師をしている。単位制普通科やビジネス科、夜間部や大人の聴講生制度まで併用している多様な学校である。生徒は前の学校在学時に心に傷を負っていたり、無気力だったり、必ずしも書に興味をもった者ばかりではない。その中で生徒の心にひびく少しでも魅力的な授業を展開するために、知識や技術はもちろんのこと、何より教える側の感性や体験に裏打ちされた感動が必要のように思う。それは自分自身の作品制作の際に一層強く感じる。何もないところから書きたい言葉を選

び、全体の作品構成を考え、線質を研ぎ込み、作品を練り込む。作品を生み出す苦しみと喜びは表裏一体であり、一朝一夕には上手いかなないものだが、それだけに自己表現の感動は大きいものである。

最近感性を研ぐためと称してできるだけ本物を見るように心がけている。大学在学時はやはり書展を中心に歩いてきたが、現在は絵画展や陶芸展、染色や工芸品の工房なども見るために時間を見つけては、京都へ足を運ぶことが多くなった。私にはそれらが良い刺激となつて作品制作のエネルギーになつていように思われる。充実して楽しかった花大時代に一つ後悔があるとすれば、もつと若い時から京都の本物の芸術を見て歩くように心がけるべきであつたということである。

「今からでも遅くはない……。」と、いささか焦りを感じている今日この頃である。

(平成2年度卒業生)

「感謝」

渡邊 りりこ

4年間書道部に属し、私の中では部活が大学生活の代名詞と言つても過言ではありません。年に2回の展覧会、合宿、練成会などが活動内容でした。仲間と共に切磋琢磨し作品制作をしたこと、1つの展覧会に向けて協力し合い仕事をしたことが懐かしい……。作品制作に関しては、展覧会のため4年間で多くの作品を作り、部員の作品を鑑賞しました。実用書も活動の一環で取り組みました。

部活に愛着を持ち始めてからは、部活での仕事の仕方や自分の在り方など考えるようになりました。しかしながら反省の連続で力不足を感じることも多々ありました。組織として決して大きな部活ではありませんでしたが、その反省や経験によつて社会的、そして人としても成長させてくれたと信じています。そして周りには、尊敬できて理解してくれる仲間達がいきました。そんな仲間達から吸収したいと思えることは多く、仲間へ恵まれたことは私の財産です。書道コースだから何となく入部を決めた部活でしたが、この部活に出会えたことに感謝しています。

現在、大学を卒業して1年弱になりますが高校書道の非常勤講師として働いています。部活に所属していたお陰で筆を持つ機会が多く、想像以上に経験が役立つています。更に、書道コースでの授業で実技では漢字、仮名、調和体、篆刻と幅広いジャンルを先生方から掘り深くご指導していただきました。書道史や書道概論の授業も含め、お陰様で現在の授業の土台になっています。今でも悩んだ時に相談にのつてくださる先生には今でも助けられています。授業は大変なこともあります。が、生徒の作品が上達する姿、楽しんでる姿を見ると素直にやり甲斐を感じます。逆にいつも元気を与えられ生徒達には「ありがとう」の気持ちです。

この文章を書かせていただき再度感じました。学生時代や現在の「感謝の気持ち」を忘れずに日々の生活、書道や仕事に励みたい。そんな想いで

(平成23年度卒業生)

◎京都市・夏期公開講座(無料)

日時 八月一日(木)〜三日(土)

午後一時半〜四時半

場所 無聖館 五階ホール

講演テーマ「絵」をよむ

一日 福島恒徳・岡澤恭子(絵解き)

二日 夏目房之介・米倉迪夫

三日 曾根誠一・高橋 亨(敬称略)

*講演題目等の詳細は、一ヶ月前までには、

花園大学ホーム・ページに掲示します。

ご確認の上、是非ご参加下さい

花園大学に留学して

劉 琴

2012年4月、蘇州大学の交換留学生として花園大学で一年間の留学生生活を始めました。23年間普通に中国で生活してきた私にとつて、目の前にあるすべてが新鮮に感じられ、未知の世界、文化を一刻も早く理解しようとしていましたが、どうしたらよいのか最初は迷っていました。でも、新人生オリエンテーションと5月の留学生の旅行、曾根先生が主催した文学散歩などによつて、琵琶湖と石山寺、東尋坊、宇治などの名所を遊覧し、日本の歴史と源氏物語などの作品について、いろいろ勉強になりました。

それから、古代文学研究特論Ⅰ(上代)、Ⅱ(中古)、国語学研究特論などの授業は、中国とは全く違う教育法で行われたので、私が受けてきた固

有教育理念や研究理念と花園大学で受けた教育理念や研究理念とが混ぜ合わされることで、自分の視点がすこしずつ開かれたような不思議な感じがあります。そして、参加した勉強会や学会などでは、私の興味があることを学べて、大変ありがたいと思っています。それらの勉強を通して、知識の面だけでなく、人生の面でも大変役にたつたと思います。例えば、一番勉強になったのは花園大学の先生方の生涯を教育と研究にささげる精神であったと思います。そして、焦らずに自分のやりたいことを着実に実行するのが大事であることも分かるようになりました。

この一年間、とても有意義で楽しい生活を送ってきたと思います。ありがとうございました！

(蘇州大学大学院生／平成24年度交換留学生)

高校の教員として二十年

石川 伸也

平成二年三月に花園大学を卒業して、早二十三年が経ちました。花大では、国語・書道の教員になるため、書道は中島皓象先生、榊原寿皓先生を中心にお世話になり、ゼミでは曾根誠一先生の薫陶を受け自分なりに充実した四年間であったと振り返っています。国立大受験が不調で、入学時は、心の一番深いところにわだかまりを持ちながら、それでも、富山の田舎から京都へ出てきて、できるだけ努力をしようと思っていました。花大では、素晴らしい仲間や先生方に恵まれ、学問の深さだけでなく、取り組む中での苦しさ、そして少

しの成果が出た時のうれしさを感じるのですが、有意義な学生生活を送れたと思っています。

大学四年時には、母校ではない花園高校で教育実習をさせていただき、花大卒業後は奈良教育大学大学院で学びながら、二年間、花園高校で非常勤講師としてもお世話になりました。大学院修了後は、兵庫県にある妙心寺派関係校の私立市川高校へ赴任することになり、今年で二十一年目となります。山田無文老大師によって校訓が定められ、河野太通老師を顧問として、理事長、副校長のほか、花大の卒業生が私を含めて現在五名奉職しております。これまでクラス担任や進学指導係として、花大へ進学を勧めた生徒も何人もおり、改めて花大を卒業したことに感謝をしております。

今、高校では、保護者対応をはじめ、学力低下の問題や、発達障害の問題、不登校の問題などに対して、教員の様々な対応能力が求められています。教員という仕事の責任の重さとやりがい、また自分をより高めていくことの必要性を常々感じて日々の勤務を続けております。

(兵庫・市川高等学校教諭、平成元年度卒業生)

ハイテクを追い続ける蘇大と

本心を求める花大

潘 文東

今年の3月末、蘇州大学と花園大学との友好交流協議により、交換教員として花園大学の外国人語学嘱託講師となった。以来、あつという間に2か月が過ぎてしまった。その間、もちろん、花園

大学と蘇州大学のことをいろいろ比較してみた。

第一に、蘇州大学より花園大学のほうがずっと小さいと最初に感じた。キャンパスはもちろん、学生の人数も少ないし、蘇州大学はキャンパスが5か所以上あり、蘇州市内だけでなく、郊外や別の町にもある。話では、最近、新しい研究センターを建設するとのこと、新しいキャンパスは2期、3期と続ける予定だという。一方、花園大学のほうは教室や図書館、研究室がみんな2〜3分の徒歩で行けるところにあり、本当に便利だと思う。花園大学に来る前に蘇州大学で出国手続きをした時、所属の外国語学院から大学の各部門へ行ったり来たりしたが、大学の西から東までは徒歩で20分かかる。車で行くと、こちらの駐車場からこちらの事務室まで、そちらの駐車場からそちらの事務室まで、あわせて10分以上かかり、あまりかわらない。自転車は便利だが、家から大学への通勤はたいへんだ。本校から20〜30キロも離れている新しいキャンパスへ行くためには、車で行かなければならない。大き過ぎる大学は不便だと常に思った。ここ20年間、蘇州大学は中国での大学ランキングがさらに上がるように頑張っている。どんどんハイテクの人材を招致し、どんどん立派な施設や設備を購入している。ナノテクやトランスレーショナル医療などの先端技術の学院や研究所を開設し、世界からトップの音楽教授を招聘して国際レベルの音楽学院を創設している。

花園大学には、16年前にも来たことがあるが、その時の記憶とあまり変わっていないと思う。

所属の文学部やCCも、図書館の建物も小さいと思うが、私が研究用に資料を探すとき、インタ

―ネットで調べて、どこの雑誌の何号がないかと探すと、期待通りに希望のものを手に入れることができる。本当に感激した。また、大学の教員はそれほど多くないから大体知り合うことができるし、交流も容易になる。

花園大学は禅宗を背景に持つ大学で人間の本来の心を求めるのを特色としている。そこから見ると、外的な拡張は必要だが、内実の充実がもつと大切ではないか。両大学の交流によって、相互の利点を吸収する必要があると思う。

今年度、私は中国文化論や中国語の会話と作文の授業を担当しているが、中国に興味をお持ちの諸君は来年度、私の担当科目を是非お選びください。

(蘇州大学副教授／交換教員)

◎転居先不明の定期購読の皆様

次の方々の現住所が不明で、「通信」を送付できないでいます。ご存知の方は、日本文学科宛にご連絡をお願いいたします。

池田良恵・門田麻美子・木之下昌広・
金徳子・高崎剛央・田尻万美子・
坪田晴子・仲林知昭・西山雅弘・
東美也子・古井美枝・室田実穂・
山田道子・山本智子・山本浩司

(敬称略、以上15名)

最近、思うこと

曾根 誠一

還暦を超えて二年目になる。姉弟と家族が小生をダシにして祝ってくれたが、今般、研究会による共著『順百首全釈』の出版祝いの場で、折から還暦を迎えた友人を祝うつもりが、小生まで赤い「KANPEKI」Tシャツなるものを着せられようとは、夢想たにしなかった。厚意は素直に受けたが、何とも面はゆい。

もう先は長くはないので、興味関心のあることを優先して、講義に臨んでいる。竹取物語・土左日記を中心にして、細部を丹念に読み込む、所謂行間を読みながら、学生を指名して巻き込み、考えていることを語っている。

一回生の「基礎講読」では、有名な文学作品の冒頭部の暗誦で出席を確認し、口語訳も提出させ、数回の調査レポートも提出してもらっている。最近、履修学生との面接を始めたが、教員志望者には昨年度の教員採用試験問題の複写を渡している。二回生の「講読」では、『土左日記』の適宜の記事を学生に割り当てて発表させ、助動詞を確認しつつ注の比較を読み、日記筆者の「女房」の位置を学生に質問しながら考えている。三回生の「演習A」では、『竹取物語』の昇天の段を、担当者作成の資料で敬語法を確認する一方で、注の比較を読み、綿密に組み立てられた作品世界の構造を把握すべく、悪戦苦闘している。そのもがきの一端を、『日本文学論究』に投稿したりしている。学生には迷惑この上ないことであろうが、作品

を読むということ、行間を読むということ、気付きの喜びを楽しむことの一環なりとも、共有していた、だけたらこれに過ぎる喜びはない。

研究会では、「好忠百首」の注釈作成のための輪読が始まった。これも含めて、今の自分にできることを、丁寧に集中して果たしてゆきたい。今という一瞬一瞬を懸命に生きる以上のことは、何もできないしなのだから。

これは、埋め草として執筆したのだが、さて、無事にお蔵入りしたのだろうか？ それとも、老醜を晒して嗤われているのだろうか？

(日本文科主任)

◎『花園大学日本文学論究』第5号

(二〇一二年十二月刊)

・「石上麻呂足の転落」の条・再読

曾根誠一

・島崎藤村『新生』における「新生」の達成―連載の休載を巡って―

宮崎 聡

・八大文化体系論と四大文化復興論―方漢文著『比較文化学新編』論評―

張 龍龍

・受贈図書目録(平成二三年一〇月〜同二四年九月)

*購入ご希望の方は、五百円(送料込み)をお振り込み下さい。折り返し郵送いたします。